

5) 花きの病害虫防除

[キク](#)・[バラ](#)・[ユリ](#)・[トルコギキョウ](#)・[カーネーション](#)・[ホズキ](#)・[スイートピー](#)
[ストック](#)・[スターチス](#)・[シュコンカスミソウ](#)・[シクラメン](#)・[パンジー](#)

・ 一般事項	253
--------	-----

(1) キクの病害虫

(病害)

1. 白さび病 (指定病害虫)	254
2. 半身萎ちょう病	255
3. 黒斑病 ・ 褐斑病	256
4. 白絹病	257
5. 菌核病	257
6. べと病	258
7. えそ病 (TSWV) 、 茎えそ病 (GSNV)	258
8. わい化病	258

(害虫)

1. アザミウマ類 (指定病害虫)	259
2. ハダニ類 (指定病害虫)	260
3. キクモンサビダニ (紋々病)	261
4. アブラムシ類 (指定病害虫)	261
5. ハスモンヨトウ	262
6. オオタバコガ	263
7. マメハモグリバエ	264
8. カスミカメ類	264
9. センチュウ類	265
10. ハガレセンチュウ	265
11. ネキリムシ類	266

(2) バラの病害虫

(病害)

1. うどんこ病	267
2. 灰色かび病	268
3. べと病	268
4. 黒星病	269
5. 根頭がんしゅ病	269

(害虫)

1. アザミウマ類	270
2. ハダニ類	270

3. アブラムシ類	272
4. ハスモンヨトウ	272
(3) ユリ（シンテッポウユリ）の病害虫	
(病害)	
1. 葉 枯 病（ボトリチス病）	274
2. 炭 疽 病	274
3. 疫 病	275
4. ウイルス病類	275
(害虫)	
1. アブラムシ類	275
2. ネ ダ ニ	276
(4) トルコギキョウの病害虫	
(病害)	
1. 立枯病	277
2. 灰色かび病	277
3. 斑点病	278
4. ウイルス病類	278
5. 青枯病	279
(害虫)	
1. アザミウマ類	280
2. ハスモンヨトウ	281
3. オオタバコガ	281
4. コナジラミ類	281
(5) カーネーションの病害虫	
(病害)	
1. 灰色かび病	282
2. さ び 病	282
3. 萎ちょう病、立枯病	283
4. 萎ちょう細菌病	283
5. 斑 点 病	284
6. ウイルス病類	285
(害虫)	
1. アザミウマ類	285
2. ハダニ類	286
3. アブラムシ類	287
4. ヨトウムシ類	288
(6) ホオズキの病害虫	
(病害)	

1. モザイク病	289
2. 斑点細菌病	289
3. 炭疽病	290
4. 白絹病	291
(害虫)	
1. アザミウマ類	291
2. ハダニ類	292
(7) スイートピーの病害虫	
(病害)	
1. うどんこ病	293
2. 灰色かび病	293
(害虫)	
1. アブラムシ類	294
(8) ストックの病害虫	
(病害)	
1. 菌核病	295
2. 苗立枯病	295
3. 苗腐病	296
(害虫)	
1. コナガ (指定病害虫)	296
(9) スターチスの病害虫	
(病害)	
1. 灰色かび病	298
2. 疫病	298
(害虫)	
1. ハダニ類	299
(10) シュッコンカスミソウの病害虫	
(病害)	
1. 疫病	300
2. うどんこ病	300
(害虫)	
1. ハダニ類	301
(11) シクラメンの病害虫	
(病害)	
1. 萎凋病	302
2. 炭疽病	302
3. 灰色かび病	303
4. 葉腐細菌病	304

5. 軟 腐 病	304
(害虫)	
1. シクラメンホコリダニ	305
2. ミカンキイロアザミウマ	305
(12) パンジーの病害	
1. 灰色かび病	307

効率的防除の推進

効果的な防除を行なうためには、栽培環境の整備、耕種的防除、物理的防除と化学的防除を組み合わせた総合防除を推進するとともに、防除適期の把握に努めることが重要である。

- (1) 作付体系を改善し、連作により増殖する土壌病害虫の発生を防止する。
- (2) 病害虫防除のてびき等を参考にしながら適正な農薬の選定と適正量の散布を行なう。

なお適正量は野菜の種類や生育ステージによって異なるが、生育初期～生育中期は 100～150L／10 a、生育後期には 150～300L／10 a を目安とする。

- (3) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌及び薬剤抵抗性害虫を出現させるため、作用性が異なる薬剤を組み合わせたローテーション防除を行う。

系統番号（IRAC コード※及び FRAC コード※）については、[「作用機構による薬剤の分類」](#)を参照。

※IRAC（世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会）により作成された殺虫剤の作用機構に基づく分類コード。

※FRAC（世界農薬工業連盟 殺菌剤耐性菌対策委員会）により作成された殺虫剤の作用機構に基づく分類コード。

- (4) 発生予察情報等を利用し、病害虫発生の的確な把握に努め、適期防除を行なう。

【一般事項】

(予防に関する措置)
・ 有害動植物に強い品種又は抵抗性が高い品種を選択する。
・ 育苗においては、有害動植物に汚染されていない培土及び資材を用いる。
・ 作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択する。水田と輪作を行っているようなほ場では排水が悪いことから、高畝又はほ場周辺に溝を設置する等の排水対策を実施する。
・ 育苗施設や育苗ほ場への有害動物の侵入を防止するため、防虫ネットの設置等を行う。
・ ほ場への雑草種子の持込み及び雑草を発生源とする有害動物の発生を抑制するために、ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
・ ほ場全体への防虫ネットの展張等により、ほ場内への有害動物の侵入を防止する。
・ 必要に応じて土壌診断を行い、診断結果を参考にして適正な施肥を行うとともに腐植含量を高めるように努め、栽培に適した土作りを行う。
・ 土壌伝染性の有害植物や有害動物（線虫）の発生が懸念されるほ場においては、植付け前に土壌消毒（土壌還元消毒、太陽熱消毒及び有害動物（線虫）の抑制効果のある緑肥の活用を含む。）を行う。
・ ウイルス病やウイロイド病、細菌病の発生が懸念される場合には、媒介しないようにはさみ等の農業用資材の消毒等を行う。前作において有害植物が発生したほ場においても、必要に応じて農業用資材を消毒する。
・ 越年株等は有害動植物の越冬源となることから、必要に応じて防除対策を取る。
(判断、防除に関する措置)
・ 生育初期において有害植物の多発生が予測される場合には、予防効果のある薬剤を散布する。
・ 発病部位を速やかに除去し、土中に埋める等適切に処分する。特に、ウイルス病、ウイロイド病等の防除が困難な有害植物の発病株を発見した場合には、早急に抜き取り、ほ場外で土中に埋める等適切に処分する。

(1) キクの病害虫

(病 害)

1. キク 白さび病 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

潜伏期間は約 10 日間といわれ、電照ギクなどの施設では冬季も発生し、周年発病を認めるようになった。露地では、梅雨期にかけて多発し、夏期での蔓延は少ない。胞子は夏胞子が認められず、冬胞子のみ認められ、その発芽最適温度は 18℃前後である。

多湿条件でやや低温ぎみの時に発病が多い。

2) 防除のねらい

発病後の薬剤散布はほとんど効果がないので、予防を徹底する。特に葉裏の発病が多いので、薬剤が葉裏に十分に付着するよう散布することが必要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 排水を図り、圃場の湿度の低下に努め、施設では換気を行い、湿度の低下を図る。
- (2) 密植を避け、通風をよくする。
- (3) 病葉は圃場外へ持ち出し処分する。特に発病初期に除去の徹底を図る。
- (4) 本病に弱い品種の栽培を避ける。

・薬剤防除

(キク 白さび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3	アンビルフロアブル (ヘキサコナゾール)	
3	サプロール乳剤 (トリホリン)	品種作型によって高温乾燥時に薬害が おこりやすいので注意する
3	チルト乳剤 2.5 (プロピコナゾール)	
3	トリフミン水和剤 (トリフルミゾール)	
3	トリフミン乳剤 (トリフルミゾール)	体質によりかぶれを生じることがある ので注意する。
3	マネージ乳剤 (イミベンコナゾール)	
3	ラリー乳剤 (ミクロブタニル)	
7	バシタック水和剤 7.5 (メプロニル)	
7	カナメフロアブル (インビルフルキサム)	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	
11	ストロビーフロアブル (クレソキシムメチル)	
39	ピリカット乳剤 (ジフルメトリム)	
39	ハチハチ乳剤 (トルフェンピラド)	魚毒性が高いので注意する。
M3	ジマンダイセンフロアブル (マンゼブ)	
BM2	インプレッションクリア (バチルスアミロリクエファシエ ンス)	混用事例が少ないため、単用散布する こと。高温時の使用を避けること。
M3	アントラコール顆粒水和剤 (プロピネブ)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してく
ださい。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬
> 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. キク 半身萎ちょう病 [【目次に戻る】](#)

1) 生 態

株全体に発生する。初めは下葉の先端に黄褐色の不規則な病斑が認められ、病勢が進む
と葉は中段まで黄化し、葉縁部は褐変して生気を失い、やがてしおれて枯死する。被害茎
葉組織に形成された菌核は土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。また、植物体に侵入し

た病原菌は茎の導管部内で繁殖するので、罹病株を親株にすると苗感染する。本病原菌の発育適温は 20℃前後である。

2) 防除のねらい

健全な挿穂、床土を用い、病原菌を圃場内に持込まない。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 床土の消毒を徹底する。
- (2) 本病原菌はキクのほかナス、トマト等にも寄生するので、これらとの連作を避ける。
- (3) 発病株は見つけ次第に施設外へ持ち出し、処分する。収穫が終わった株は根ごと抜き取り、処分する。
- (4) わずかでも発病を認めた圃場からは採穂しない。
- (5) 発病には品種間差が認められ、秀芳の力（白・黄）で弱く、精雲、サニー、チェリーレフォールでは比較的強い。

3. キク 黒斑病・褐斑病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

両病害の病徴は非常に似ており、区別がつけにくい。本病菌は罹病葉上で越冬し、翌年の伝染源となる。落葉した罹病葉から翌年降雨等により分生子がはね上がり、下葉から発病してくる。潜伏期間は 28℃で 20 日前後と長い。

2) 防除のねらい

発病後の防除では手遅れになるので、予防が必要である。多湿や肥料切れした場合に発病が多い。露地では、梅雨期に発病が多い。電照ギクなど施設では周年発病を認める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 敷わらまたはプラスチックフィルムでマルチをする。
- (2) 無病圃場で近くにも発病株がない圃場から採苗する。
- (3) 圃場は多湿にならないよう排水および通風、採光をよくする。
- (4) 肥料切れしないよう肥培管理を行う。
- (5) 被害葉は除去する。
- (6) 灌水の際、土粒が跳ね上らないよう注意する。

・薬剤防除

(キク 黒斑病、褐斑病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M5	ダコニール 1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してく

ださい。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

4. キク 白 絹 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

被害部に粟粒大の菌核を生じ土中に残存して越年する。したがって、連作圃場は発病が多くなる。花、野菜など多くの植物の根を腐敗させ、また、敷わらで繁殖することが多い。

2) 防除のねらい

菌核は落ちやすいので菌核形成前に被害株を除去して感染源を少なくする必要がある。連作を避け、やむを得ず連作する場合は土壤消毒を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 連作をしない。
- (2) 被害株、病菌の付いた敷わらは直ちに除去する。
- (3) 育苗床の土は無病土を用いる。
- (4) 未熟有機物の利用は避ける。

・薬剤防除

土壤消毒については「5. 病虫害防除共通資料 (10) 土壤消毒・資材消毒」参照
(キク 白絹病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
14	リゾレックス水和剤 (トルクロホスメチル)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

5. キク 菌 核 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

被害部に生じた菌核が落下し、土壤中で越年、越夏し、春と秋の比較的低温期に子のを盤を作り、子のを胞子の飛散によって伝染する。菌糸の発育適温は 18～20℃付近であり、子のを胞子は多湿条件下で良く発芽する。したがって、20℃前後で多湿の時に発病が多く、ハウスでは冬季に多発生する。

2) 防除のねらい

健全な挿穂、床土を用い、病原菌を圃場内に持込まない。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 床土は無病土を用いる。
- (2) ハウス栽培では暖房機により過湿防止を図る。
- (3) 夏季湛水を行う。
- (4) 窒素過多を避ける。
- (5) 被害株は早めに除去し、土中深く埋没する。

・薬剤防除

- (1) 土壌消毒

「5. 病害虫防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」参照

6. キク ベと病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉の一部に不整型で境界が不明瞭な退緑斑を生じ、次第に葉全体に拡大して、病斑部は黄褐色から褐色に変化して最後には枯死する。葉裏には、白色のかびを生じる。多湿条件で発生しやすい。

2) 防除のねらい

多発すると防除は困難であることから、葉に境界が不明瞭な退緑斑や葉裏に白いかびを生じていないかをよく観察し、早期発見に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病部位は早めに切除し、圃場外で処分する。
- (2) 施設栽培では換気に努め、ハウス内の湿度を低く保つ。
- (3) 密植を避け、株間の通風を良くする。

7. キク えそ病 (TSWV)・茎えそ病 (CSNV) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 TSWV 及び CSNV」参照

8. キク わい化病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本病の病原はキクわい化ウイルス (CSVD) である。挿し穂は発根不良となる。発病すると、葉は小型化・退色し、葉縁が下方に巻き、茎の節間が短縮して草丈が短くなる。また、茎との角度が小さくなり、直立して生育したり、健全株よりも開花が早まる傾向に

ある。これらの病徴は、C S V d が増殖する 25～30℃になると目立ちやすい。管理作業による汁液伝染により拡大する。

2) 防除のねらい

- (1) 健全穂の使用。
- (2) 管理作業時の汁液伝染の防止。

3) 防 除 法

- (1) 健全な親株から採取した苗を用いる。
- (2) 罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、処分する。
- (3) ハサミの消毒を行う。

(害 虫)

1. キク アザミウマ類 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

県下では、クロゲハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ及びネギアザミウマによる被害が確認されている。キクにおける被害は、4月～6月の生育初期に多く、花弁の色落ち、葉の奇形、シルバリング、褐変を生じる。県内では、露地キクでは夏から秋にかけて、施設キクでは周年の発生を確認している。

近年、クロゲハナアザミウマ成幼虫による葉および花の被害が増加しており、葉での被害はハダニ類による葉のかすれ症状とよく似ている。

ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ及びネギアザミウマの生態については、「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」を参照。

2) 防除のねらい

- (1) 発生初期の防除を徹底する。また、圃場内外の増殖源の除去が効果的である。
- (2) クロゲハナアザミウマによる葉の被害は、ハダニ類によるかすれ症状と間違えやすいため、葉をよく観察して使用薬剤を選択するとともに、本種は葉裏に多く生息しているため、葉裏にも薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 圃場周辺の雑草を除去する。
- (2) 成幼虫の寄生がない穂や苗を定植する。
- (3) シルバーポリマルチを使用すると、アザミウマ類の発生を抑制する効果がある。
- (4) 施設栽培では、施設開口部へ防虫ネットを設置すると、アザミウマ類の侵入を抑制する効果がある。

・薬剤防除

- (1) 多発生してからでは防除が困難であるので、発生初期から防除を徹底する。
- (2) 親株圃場、挿し床及び育苗圃場では防除を徹底する。
- (3) 発生を抑えるため、定植時に粒剤を施用する。

(4) 1回の散布では効果があがりにくいので数回連続散布を行う。

(キク アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1A	オンコル粒剤5 (ベンフラカルブ)	
1B	トクチオン乳剤 (プロチオホス)	
1B	オルトラン水和剤 (アセフェート)	
3A	アーデント水和剤 (アクリナトリン)	
4A	アドマイヤー1粒剤 (イミダクロプリド)	
5	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)	
6	アフアーム乳剤 (エマメクチン安息香酸塩)	
13	コテツフロアブル (クロルフェナピル)	
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
15	マッチ乳剤 (ルフェスロン)	
30	グレーシア乳剤 (フルキサメタミド)	
4C	トランスフォームフロアブル (スルホキサフロル)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. キク ハダニ類（**指定病害虫**）[\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年間十数世代をくり返し、高温乾燥の条件下で繁殖が盛んとなり、温室やビニールハウスなどでは、冬でも発生を認める。

2) 防除のねらい

発生が多くなると完全な防除ができにくいので、早期発見に努め、新芽および葉裏までむらなく薬剤を散布する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

(1) 発生株から挿穂しない。

(2) ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

・薬剤防除

(キク ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	テルスターフロアブル (ビフェントリン)	
10B	バロックフロアブル (エトキサゾール)	花き類・観葉植物で登録
20D	マイトコーネフロアブル (ビフェナゼート)	
21A	ピラニカEW (テブフェンピラド)	
21A	サンマイトフロアブル (ピリダベン)	
25A	スターマイトフロアブル (シエノピラフェン)	
25B	ダニコングフロアブル (ピフルブミド)	花き類・観葉植物で登録
-	サンクリスタル乳剤 (脂肪酸グリセリド)	花き類・観葉植物で登録
※ -	フーモン (ポリグリセリン脂肪酸エステル)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. キク キクモンサビダニ（紋々病）[\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本虫の雌成虫は体長 0.2mm 前後で淡黄色をし、成虫で越冬するが、卵や幼虫での越冬は不明である。ダニの発生は3～7月と秋に多くなる。生息部位は主に新葉で、展開し始めた葉に生息密度が高く、加害を受けた葉は直径数 cm の黄色で明瞭または不明瞭な輪紋を生ずる。本虫の加害によるこのような症状を「紋々病」という。また、加害部の葉や茎の表面が褐色となるサビ症状も生ずる。

前年の被害株から挿し穂を採ると、サビダニの寄生した株を苗に養成することになるため、被害が増大する。

2) 防 除 法

・耕種的防除

サビダニの寄生した親株から採穂しない。

4. キク アブラムシ類 (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

キクに寄生するアブラムシ類は、数種知られているが、ワタアブラムシの発生が一般に多い。ハウス栽培では、冬季にも発生を認めるが、特に晩春から秋にかけて多発し、新芽やつぼみに寄生し、汁液を吸収して生育を阻害する。

2) 防除のねらい

ウイルス病を媒介するので、発生に注意し早めに防除する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 防虫ネット等を用いて有翅虫の飛来を防止する。
- (2) 圃場周辺に雑草を繁茂させない。

・薬剤防除

(キク アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 (ジノテフラン)	
4A	ベストガード水溶剤 (ニテンピラム)	
29	ウララ50DF (フロニカミド)	
9B	コルト顆粒水和剤 (ピリフルキナゾン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

5. キク ハスモンヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 ハスモンヨトウ」参照

(キク ハスモンヨトウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
11A	ゼンターリ顆粒水和剤 (B T (生菌))	
UN	ブレオフロアブル (ピリダリル)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

6. キク オオタバコガ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「3) 野菜・花き病虫害の生態と防除 オオタバコガ」参照

(キク オオタバコガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
5	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)	
UN	ブレオフロアブル (ピリダリル)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

7. キク マメハモグリバエ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「3) 野菜・花き病虫害の生態と防除 ハモグリバエ類」参照

(キク マメハモグリバエ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	オルトラン水和剤 (アセフェート)	
1B	オルトラン粒剤 (アセフェート)	
1B	カルホス乳剤 (イソキサチオン)	
4A	ダントツ水溶剤 (クロチアニジン)	
5	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)	
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	
17	トリガード液剤 (シロマジン)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

8. キク カスミカメ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本県では「ウスモンミドリカスミカメ」及び「ツマグロアオカスミカメ」の成虫による被害を確認している。本虫に食害されると芯止まり、茎曲り、葉の破れ・穴、葉及び花の奇形を生じる。野外では、5月から1月上旬頃まで活動する。

2) 防除のねらい

本虫は主に夜間の電照により誘引され、周辺のキク科雑草から断続的に飛来し被害を及ぼすと考えられる。発生源である周辺のキク科雑草を除去することが重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

(1) 施設栽培では電照をする際に、施設開口部に防虫ネット等被覆資材を設置することが望ましい。

(2) キク科雑草の蕾に産卵する傾向にあることから、出蕾前に除草を行い、発生源を除

去する。

9. キク センチュウ類 [\[目次に戻る\]](#)

根の内部に侵入し加害するネグサレセンチュウ類、ネコブセンチュウ類と、常に土壌中で生活し、根の表面から口針で吸汁加害するイシユクセンチュウ類、ユミハリセンチュウ類およびピンセンチュウ類などがある。一般に被害が大きいのは、ネグサレセンチュウ類とネコブセンチュウ類である。

- 1) 生 態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防 除 法
 - ・ 薬剤防除

「5. 病害虫防除共通資料 (11) 線虫類と防除法」参照

(キク ネグサレセンチュウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	ネマキック粒剤 (イミシアホス)	
8B+8A	ソイリーン (クロルピクリン, D-D)	耕起整地後、30cm間隔のチドリ状に深さ約15cmに所定量を注入し、直ちに覆土し、ポリエチレン、ビニール等で被覆する。
※ FRAC コード : C2	ビーラム粒剤/ネマクリーン粒剤 (フルオピラム)	

注) IRAC コード及び FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

10. キク ハガレセンチュウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態

ハガレセンチュウは、葉の気孔から侵入し、葉脈でしきられた扇形などの病斑を生じ、降雨、灌水などの時に水滴の跳ね上りや、濡れた部分を伝って移動する。5月から10月にかけて発生が多く、キクのほか、キンセンカ、ヒャクニチソウ、グロキシニア、アスター、ボタン、ガーベラ、ヨモギなどにも寄生する。

- 2) 防除のねらい

連作すると一般に発生が多くなるので、土壌消毒する。

- 3) 防 除 法

- ・ 耕種的防除

- (1) 連作を避ける。

- (2) 発生を認めた圃場からの芽は採穂せず、頂芽繁殖を行う。
- (3) 被害葉は、早めに除去する。
- (4) 敷わらにより水滴の跳ね上りを防ぐ。

・薬剤防除

「5. 病虫害防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」参照

1 1. キク ネキリムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除法

・薬剤防除

「4) 野菜の病虫害防除 (7) アブラナ科の害虫・ネキリムシ類」
参照

「5. 病虫害防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」を参照。

(2) バラの病害虫

(病 害)

1. バラ うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

被害植物体内で越冬し、春と秋に発生する。20～25℃の多湿条件下で発生が多い。

2) 防除のねらい

発病を見てからの防除は効果が十分でないので、予防散布を主として防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 通風をよくし、多湿を避ける。
- (2) 罹病落葉を圃場外へ持ち出し処分する。
- (3) 窒素過多を避ける。
- (4) 抵抗性品種を選ぶ。

・薬剤防除

薬剤は葉裏にも十分かかるよう散布する。

(バラ うどんこ病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
1	ベンレート水和剤 (ベノミル)	
3	アンビルフロアブル (ヘキサコナゾール)	
3	サプロール乳剤 (トリホリン)	品種によって高温乾燥時に葉害があるので注意する。
3	トリフミン水和剤 (トリフルミゾール)	
3	ラリー乳剤 (ミクロブタニル)	
3	ルビゲン水和剤 (フェナリモル)	
19	ポリオキシシンAL乳剤 (ポリオキシシン複合体)	
M7+19	ポリベリン水和剤 (イミノクタジン酢酸塩,ポリオキシシン複合体)	
NC	カリグリーン (炭酸水素カリウム)	花き類・観葉植物で登録

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#)）。

2. バラ 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防 除 法
- ・耕種的防除
 - ・薬剤防除

[カーネーションの灰色かび病の項](#)参照。

(バラ 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	サンヨール (DBEDC)	
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質により、かぶれを生ずることがあるので 注意する。

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

3. バラ ベ と 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

春、秋の昼夜間の温度較差が大きく、多湿条件の場合に発生が多い。特に窒素過多で発生が助長される。

2) 防除のねらい

効果の高い薬剤がないので、発病しないよう管理を行い、薬剤は予防散布を主として、防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発生を認めたら、発病枝、葉を直ちに除去する。
- (2) 通風採光に努め、多湿にならないよう管理する。
- (3) 窒素過多を避ける。
- (4) 昼夜間の温度較差を少なくするため暖房する。
- (5) 抵抗性品種を選ぶ。

・薬剤防除

薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。

(バラ ベと病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質により、かぶれを生ずることがあるので 注意する。

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください

ださい。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

4. バラ 黒星病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は枝や落葉の病斑部で越冬し、翌年4月頃から発生し、ひどくなると落葉する。
5～6月と秋季の多雨時に発病が著しい。露地で多発しやすい。

2) 防除のねらい

多発病枝を除去し、発病前からの予防防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 落葉や罹病枯枝を圃場外へ持ち出し処分する。
- (2) 密植を避け通風をよくする。
- (3) マルチをして病菌の跳ね上りを防ぐ。

・薬剤防除

(バラ 黒星病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
3	サプロール乳剤 (トリホリン)	品種によって高温乾燥時に薬害があるので注意する。
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報」を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#))。

5. バラ 根頭がんしゅ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は土壌伝染性の細菌で、土壌中で越冬するので、連作地に発病が多い。傷口から侵入し、潜伏期間は5～20日間であるが、長い場合は3か月位の時もある。バラのほか、ウメ、モモ、ダリアなども侵す。

2) 防除のねらい

発病後は根絶が難しいので、苗木生産段階での感染を防ぐことが重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全土壌に健全苗を植え付ける。
- (2) 4年間位は輪作を行う
- (3) 被害部は健全部まで含めて完全に削り取る。

・薬剤防除

(バラ 根頭がんしゅ病)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
8F	バスアミド微粒剤 (ダゾメット)	花き類・観葉植物で登録

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(害 虫)

1. バラ アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ヒラズハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマ等が花の部分に寄生し、加害するため、花卉に褐変やかすり状の傷を生じ、商品価値を著しく低下させる。ヒラズハナアザミウマやミカンキイロアザミウマは花粉への嗜好性が強いいため、開花程度がすすんだ花を圃場内に多く残すと、それが増殖源となる。その結果、圃場内の生息密度が高くなり、被害が増大する。

ネギアザミウマは多犯性で、多くの植物の葉、花に寄生し被害を与える。

ミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマについては、「Ⅲ 野菜・花きに発生する侵入害虫等の生態と防除」の項を参照。

2) 防除のねらい

発生初期の防除を徹底する。また、圃場内外の増殖源の除去が効果的である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 出荷できない花や出荷適期を過ぎた花を圃場内に残しておくとな増殖源となるため、不必要な花を除去する。
- (2) アーチング方式やハイラック方式で株を仕立てた場合、不要な花が同化専用枝に多く着生するので、これを除去する。
- (3) 圃場周辺の雑草を除去する。

・薬剤防除

(バラ アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	花き類・観葉植物で登録
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. バラ ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

バラにはナミハダニが多く寄生する。ハダニ類は葉の裏側に寄生し、養分を吸収するので、寄生をうけた葉は、初め、葉に点々とかすり状の白斑ができ、ひどくなってくると、葉は一面にかすり状になって枯れてくる。ハダニ類は高温、乾燥の条件で繁殖が盛んであり、10 日前後で 1 世代をくり返す。

2) 防除のねらい

ハダニ類が寄生した葉は、表から見ると白いかすり状の点々が見えるが、ごくわずかに白点のある発生初期を見つけることが、防除を行う上で重要である。ハダニ類は葉裏にるので、防除はハダニの発生初期に薬剤が葉裏によくかかるよう行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除法

ハダニ類は雑草にも寄生するので、圃場周辺の雑草を除去する。

・薬剤防除

(バラ ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
10B	バロックフロアブル (エトキサゾール)	花き類・観葉植物で登録
25A	ダニサラバフロアブル (シフルメトフェン)	花き類・観葉植物で登録

品種によっては、薬害が発生する場合があるので注意する。

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

3. バラ アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

バラヒゲナガアブラムシ、バラミドリアブラムシ、モモアカアブラムシなどが寄生し、新芽や若芽、つぼみなどの生育を阻害する。

発生は春に多いが、秋にも発生する。ハウスなどでは冬季でも発生を認める

2) 防除のねらい

有翅虫の侵入を防止することが重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

有翅虫の飛来を防止するため防虫ネットで被覆する。

・薬剤防除

(バラ アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1B	オルトラン水和剤 (アセフェート)	
1B	オルトラン粒剤 (アセフェート)	
3A	マブリック水和剤 20 (フルバリネート)	
4A	ダントツ水溶剤 (クロチアニジン)	
4A	ベストガード粒剤 (ニテンピラム)	

注) IRAC コードについては、章末の [「作用機構による薬剤の分類」](#) 参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#) を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#) を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

4. バラ ハスモンヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

(バラ ハスモンヨトウ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
28	フェニックス顆粒水和剤 (フルベンジアミド)	

注) IRAC コードについては、章末の [「作用機構による薬剤の分類」](#) 参照

「 3) 野 菜 ・ 花 き 病 害 虫 の 生 態 と 防 除 」 参 照

- 注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。
- 注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(3) ユリ（シンテッポウユリ）の病害虫

(病 害)

1. ユリ 葉 枯 病（ボトリチス病）[\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

菌核や被害部の菌糸で越冬し、温室では分生胞子でも越冬する。多湿条件で発病しやすく、露地では6月の梅雨期頃に多発し、温室では灌水過多など多湿の場合に発病が多い。

2) 防除のねらい

圃場の湿度管理に留意し、蔓延を防ぐ。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害茎葉は早めに除去する。
- (2) 排水を図り通風、採光をよくする。

・薬剤防除

(ユリ 葉枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. ユリ 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

土壤中の被害植物体で越冬する。一般に 22～24℃の気温で発生が多い。

2) 防除のねらい

排水不良畑や多雨の天候の時が多いので多湿は避ける。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 畝は中高にして排水をよくする。
- (2) 窒素過多を避ける。
- (3) 連作を避ける。

3. ユリ 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

主に茎葉、花らいおよびりん茎に発生。茎葉や花らいには初め水浸状の小班が生じて灰緑色を呈し、軟化腐敗する。りん茎ではりん片上に褐色、水浸状の腐敗斑を生じて軟化し、腐敗枯死する。病原菌は被害残渣とともに土壤中に長期間残存して伝染源となる。水媒伝染し、特に、30℃前後で多湿の場合に発生が多い。本病原菌はユリのほかカーネーション、宿根カスミソウ、スターチス、イチゴ、ナス等も侵す多犯性菌である。

2) 防除のねらい

灌水等の水管理に留意し、土壌からの感染を防止する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株は直ちに除去する。
- (2) 灌水の際、土粒を飛散させない。
- (3) 排水をよくし、ハウス内では多湿にならないように管理する。
- (4) 発病圃場付近でのカーネーション、ナス、トマト、イチゴ等の栽培は避ける。

4. ユリ ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

キュウリモザイクウイルス (CMV)、リンゴステムグルーピングウイルス (ASGV) など数種のウイルスが認められ、病徴はユリの品種や感染したウイルスの種類、複合感染の有無などによって様々である。CMV などはアブラムシ類により媒介されるが、ASGV は種子伝染、汁液伝染する。

2) 防除のねらい

多様な感染経路に十分注意して栽培を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 無病母球（種子）を選ぶ。
- (2) 発病株は見つけ次第に抜き取り、手指を石けん等でよく洗う。
- (3) 防虫ネット等を用いてアブラムシの侵入を防ぐ。

・薬剤防除

アブラムシ類の防除を行う。[\(ユリのアブラムシ類の項参照\)](#)

(害 虫)

1. ユリ アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ユリを加害するアブラムシには、ワタアブラムシなどが知られている。若芽の心部、葉裏、つぼみなどに寄生して吸汁するばかりでなく、いずれもウイルス病を媒介する。

2) 防除のねらい

6月頃に特に発生が多く、温室では通年発生するので防除を徹底する。球根育成中は寒冷紗で被覆する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

有翅虫の飛来を防止するため防虫ネットで被覆する。

・薬剤防除

(ユリ アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 (ジノテフラン)	花き類・観葉植物で登録
29	ウララ50DF (フロニカミド)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用](#)
[方法参照](#)）。

2. ユリ ネ ダ ニ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

年間数世代を経過し、成虫または幼虫で越冬する。高温多湿（適温は 24～27℃）で極めて繁殖が盛んとなり、好条件のもとでは 10～12 日で成虫となる。圃場ではもちろん貯蔵中においても被害を及ぼし、ユリ、チューリップ、スイセン、ヒヤシンス、アマリリス、ラッキョウなどのほか、多くの球根類を侵す。

2) 防除のねらい

栽培中に発生すると防除が困難であるため、予防防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

植え付け、貯蔵の際は寄生していない球根を選び温湯消毒を行う。（45℃で 1 時間：温度厳守）

・薬剤防除

前作に球根を栽培した場合は土壌消毒を行う。「5. 病虫害防除共通資料 （10）土壌消毒・資材消毒」を参照。

(4) トルコギキョウの病害虫

(病 害)

1. トルコギキョウ 立枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

被害部に菌核を生じ、土中に落ちて越冬し、翌春発芽して胞子を飛散して伝染する。春秋2回発生するがハウスは冬季でも発生する。

キク、カーネーションのほか、キャベツ、キュウリなどにも発生する。

2) 防除のねらい

発病してからでは手遅れなので、健全な床土を用いる必要がある。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病の恐れのある圃場では30cm以上天地返しを行う。
- (2) 被害株を圃場外へ持ち出し処分する。

2. トルコギキョウ 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

} [カーネーションの灰色かび病の項](#)を参照。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害茎葉は圃場外に持ち出し処分する。
- (2) 多湿にならないよう換気に注意する。

・薬剤防除

(トルコギキョウ 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	
BM2	ボトキラー水和剤 (パチルス ズブチリス)	温風器ダクト投入による使用。

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. トルコギキョウ 斑点病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本病は、*Pseudocercospora nepheloides* による病害で、盛夏を除き、ほぼ年間を通して発生する。まず、下位葉に 5～10mm 程度の退緑斑が生じ、上位葉に進展する。退緑斑上には、葉の表裏に灰褐色～黒褐色のすす状の分生子が形成される。培地上での菌の生育適温は 25℃前後で、潜伏期間は 15 日程度である。多湿条件で発生しやすい。

2) 防除のねらい

多発すると防除は困難であることから、葉に退緑斑や灰褐色～黒褐色のすす状の病斑が生じていないかをよく観察し、早期発見に努め、感染前の薬剤による予防散布を実施する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病部位は早めに切除し、圃場外で処分する。
- (2) 施設栽培では換気に努め、ハウス内の湿度を低く保つ。
- (3) 密植を避け、株間の通風を良くする。

・薬剤防除

(トルコギキョウ 斑点病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M5	ダコニール 1000 (T P N)	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

4. トルコギキョウ ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

○えそモザイク病（CMV）

1) 生 態

本病はキュウリモザイクウイルス（CMV）によるウイルス病である。初め、新葉に軽いモザイクを生じ、症状が進むと、頂葉がねじれて目立つようになる。葉や花が小型化したり、株が矮化する。また、葉にえそ斑を生じ、茎に条斑を生じることもある。伝染はアブラムシ類による伝染、作業管理による汁液伝染で、種子伝染、土壌伝染はない。

2) 防除のねらい

ウイルスを媒介するアブラムシ類の防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株の早期発見、早期抜き取りを行う。
- (2) 施設開口部を防虫ネット等で被覆し、有翅アブラムシの侵入を防ぐ。
- (3) 摘心や収穫などの作業の際、発病株に触れないように注意する。
- (4) アブラムシ類の生息場所になり、伝染源になる周辺雑草を除草する。

・薬剤防除

媒介虫であるアブラムシ類の防除を行う。

○ トルコギキョウ葉巻病（TYLCV）

1) 生 態

本病はTYLCV（トマト黄化葉巻ウイルス）によるウイルス病で、トマト黄化葉巻病と同じウイルスである。症状は、発病部位より上は節間が縮み、萎縮する。葉は小型化し、葉脈が隆起し、表面を内側にして巻く。まれに、葉脈間がわずかに黄化したり、花が小型化する場合があります、これらの症状により商品価値が著しく低下する。伝染は、タバココナジラミによってのみおこり、オンシツコナジラミ、アブラムシ類による伝搬はない。また、作業管理による汁液伝染、土壌伝染、種子伝染はしない。

宿主範囲は経済的栽培作物ではトマト、トルコギキョウで、その他の作物、雑草ではシロバナチョウセンアサガオ、タバコ、ヒャクニチソウ、エノキグサ（トウダイグサ科）、ウシハコベ等である。

2) 防除のねらい

媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防ぐ。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株の早期発見、早期抜き取りを行う。
- (2) 施設開口部を防虫ネット等で被覆し、タバココナジラミの侵入を防ぐ。
- (3) タバココナジラミの生息場所になり、ウイルスの伝染源になる周辺雑草を除草する。

○ えそ輪紋病（IYSV）

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「3) 野菜・花き病虫害の生態と防除 IYSV」参照

5. トルコギキョウ 青枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は細菌の一種で土壤中に生存し、多犯性でトルコギキョウ、トマト、タバコなど200種以上の植物を侵す。はじめは、下葉が萎凋する程度であるが、症状が進行すると茎葉全体が萎凋し、やがて葉が灰褐色または褐色に変色し枯死する。これらの株の維管束には褐変が見られ、茎の切断面を水に浸すと、維管束部から乳白色の病原細菌が逸出することが多い。

2) 防除のねらい

発病圃場では、土壌消毒を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株は圃場外へ持ち出し処分する。
- (2) 発病株に触れたハサミ、ナイフはその都度消毒する。
- (3) 排水を良くし、地下水位の安定を図るとともに多湿にならないようにする。

(害 虫)

1. トルコギキョウ アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

「3) 野菜・花き病虫害の生態と防除 アザミウマ類」参照

3) 防 除 法

・耕種的防除

圃場周辺の雑草を除去する。

・薬剤防除

(トルコギキョウ アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
5	ディアナSC (スピネトラム)	
13	コテツフロアブル (クロルフェナビル)	
21A	ハチハチフロアブル (トルフェンピラド)	魚毒性が高いので注意する。

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

2. トルコギキョウ ハスモンヨトウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
- 「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 ハスモンヨトウ」参照

3. トルコギキョウ オオタバコガ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・耕種的防除
- 「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 オオタバコガ」参照

4. トルコギキョウ コナジラミ類 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
 - 3) 防 除 法
 - ・耕種的防除
 - ・薬剤防除
- 「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 コナジラミ類」参照

(トルコギキョウ コナジラミ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
9B	コルト顆粒水和剤 (ピリフルキナゾン)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(5) カーネーションの病害虫

(病 害)

1. カーネーション 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は被害茎葉や菌核で越冬し、温室では分生孢子でも越冬する。多雨の時に発病が多く、特にビニールハウスで発生しやすく、換気不良など多湿条件で発病が多い。

2) 防除のねらい

温室では換気を行って湿度を下げ、発病しにくい環境条件をつくることが大切である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害茎葉はできるだけ圃場外へ除去する。
- (2) 施設では換気をよくする。

・薬剤防除

(カーネーション 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3	エムダイファー水和剤 (マンネブ)	
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生ずることがあるので注意する。
M7+19	ポリバリン水和剤 (イミノクタジン酢酸塩,ポリオキシン複合体)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. カーネーション さ び 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

夏孢子によって蔓延し、越冬は夏孢子によって多く行われる。ニシキソウが中間寄主で、越冬してさび孢子を形成し、これがカーネーションに感染して夏孢子を形成することもある。

2) 防除のねらい

一旦、発病すると防除が困難であるため、被害茎葉は発病初期のうちに除去し、防除の徹底を図る。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害茎葉はできるだけ除去し、圃場外へ持ち出し処分する。
- (2) 施設では換気を徹底し、多湿にならないように注意する。

・薬剤防除

(カーネーション さび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
7	バシタック水和剤 7.5 (メプロニル)	
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	体質によりかぶれを生ずることがあるので注意する。

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. カーネーション 萎ちょう病、立枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は土壤中で越冬し、地際や根に傷がつくと発病しやすい。

発病圃場の株から採穂すると罹病しやすい。

2) 防除のねらい

発病後の防除は、期待できないので、予防策の徹底に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病圃場から採穂しない。
- (2) 茎や根に傷をつけない管理に努める。
- (3) 被害株を周囲の土とともに除去する。
- (4) 被害株や病土を持ち込まないよう注意する。

・薬剤防除

- (1) 「5. 病虫害防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」を参照
- (2) 発病後の処理剤として、タチガレン液剤 500 倍の 3 L/m² 灌注が有効である (立枯病に登録)。

4. カーネーション 萎ちょう細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

春から秋にかけて発生するが、多くは夏に発生する。病徴は青枯症状を呈し、茎から白色の菌泥が溢出する。

2) 防除のねらい

病原菌は土壌伝染を行い、罹病株からの採穂によって蔓延するので、挿し穂採取の際は切片テストを実施し、健全な親株から採穂する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 健全土壌に栽培する。
- (2) 発病圃場から採穂しない。

・薬剤防除

「5. 病虫害防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」を参照。

5. カーネーション 斑点病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は、被害茎葉とともに菌糸や分生胞子の形で土壌表面に散乱したり、土中に埋没残存し、そこに形成された分生胞子が飛散して蔓延する。病原菌の増殖活動は比較的高温（生育適温が26～27℃）で多湿条件を好んで旺盛となるので、温室では、定植後から発生し始め、生育全期を通じて発生がみられる。特に、9月から10月にかけて多く発生する。また、最近では冷蔵苗が定植後にひどくおかされる例が多い。草体が柔らかく、大輪系のものは発病しやすい。

2) 防除のねらい

挿穂等を介して病原菌を圃場に持ち込まないようにする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株から採穂しない。
- (2) 育苗期には過湿にならないようにする。
- (3) 被害茎葉は早めに除去する。

・薬剤防除

(カーネーション 斑点病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
19	ポリオキシンAL乳剤 (ポリオキシン複合体)	
M5	ダコニール1000 (TPN)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

6. カーネーション ウイルス病類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

カーネーションエッチドリリングウイルス (C a E R V)、カーネーション潜在ウイルス (C a L V)、カーネーション斑紋ウイルス (C a r M V) 等、数種類のウイルスによるウイルス病がある。この症状は品種やウイルスの種類で異なるが、輪点型 (コーラル種に多く見られる)、条斑型 (ピーターやムシ系に多く見られる)、紫斑型 (コーラル種に多く見られる)、まだら型などがある。ほとんどのウイルスは汁液により感染し、アブラムシにより伝搬される。ウイルスの種類によって異なるが、主な伝染源植物はナデシコ科植物である。

また、葉および花にモザイク、奇形、条斑などの症状を示すキュウリモザイクウイルス (C M V) によるモザイク病があり、アブラムシ等により伝搬される。伝染源植物としては、ツユクサ、ハコベ、ノゲシ、カラスウリ等がある。

2) 防除のねらい

ウイルスを媒介するアブラムシ類の防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株から採穂しない。
- (2) 寒冷紗等を用いて保毒した有翅虫の飛来を防ぐ。
- (3) 発病株や伝染源となる植物は早急に除去する。

・薬剤防除

アブラムシの防除を行う。([カーネーションアブラムシ](#) の項を参照)

(害 虫)

1. カーネーション アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

カーネーションを加害するアザミウマは主としてヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマである。これらは多数の作物や雑草を寄主植物としており、高温乾燥時には繁殖が旺盛になる。25℃では、ヒラズハナアザミウマは 10 日間、ネギアザミウマは 16～17 日間で成虫となる。また、平均産卵数はヒラズハナアザミウマは 500 個、ネギアザミウマは 73 個で、施設栽培では冬期でも発生し、被害が見られる。

葉や花卉を食害、吸汁し、葉緑素や色素を破壊するため、葉や花にカスリ状の小斑点を生じたり、変色する。また、芯葉の間に寄生すると、芯葉の展開は止まり、芯止まりとなって、側枝が多く発生する。

2) 防除のねらい

花に寄生すると価値がなくなるので、開花期から防除を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

圃場周辺の雑草を除去する。

・薬剤防除

本虫は生長点、葉裏に生息するので、薬剤は丁寧に散布する。

(カーネーション アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1A	オンコル粒剤5 (ベンフラカルブ)	
4A	モスピラン水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	
5	ディアナSC (スピネトラム)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. カーネーション ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

カーネーションにはニセナミハダニ、ナミハダニの発生が認められる。年間十数世代をくり返し、高温乾燥の条件下で繁殖が盛んとなり、温室、ビニールハウスなどでは、冬でも発生を認める。

2) 防除のねらい

発生が多くなると完全な防除ができにくいので、早期発見に努める。

3) 防 除 法

・薬剤防除

- (1) ハダニ類は年間の発生回数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一薬剤の連用は避ける。
- (2) 新芽および葉裏まで、むらなく薬剤を散布する。

(カーネーション ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	マブリック水和剤 20 (フルバリネート)	
21A	サンマイトフロアブル (ピリダベン)	
21A	ダニトロンフロアブル (フェンピロキシメート)	
21A	ピラニカEW (テブフェンピラド)	
2A	ペンタック水和剤 (ジエノクロル)	施設栽培に限る

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

3. カーネーション アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

アブラムシは主としてワタアブラムシが寄生し、温室・ビニールハウス内では冬季も発生を認めることがある。特に育苗期に寄生が多いと生育が悪くなる。ウイルス病も媒介する。

2) 防除のねらい

有翅虫の侵入を防止することが重要である。また、発生した場合には早急に防除する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

育苗期は有翅虫の飛来を防止するため寒冷紗で被覆する。

・薬剤防除

(カーネーション アブラムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	ダントツ水溶剤 (クロチアニジン)	
9B	チェス顆粒水和剤 (ピメトロジン)	

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用方法参照](#)）。

4. カーネーション ヨトウムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
- 2) 防除のねらい
- 3) 防 除 法

- ・ 耕種的防除
- ・ 薬剤防除

「3) 野菜・花き病虫害の生態と防除 ハスモンヨトウ」参照

(カーネーション ヨトウムシ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
18	ロムダンフロアブル (テブフェノジド)	
28	フェニックス顆粒水和剤 (フルベンジアミド)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(6) ホオズキの病害虫

(病 害)

1. ホオズキ モザイク病 [\[目次に戻る\]](#)

ホオズキのモザイク病は、タバコマイルドグリーンモザイクウイルス (TMGMV)、トマトモザイクウイルス (ToMV) とキュウリモザイクウイルス (CMV) などによって発生する。

① トマトモザイクウイルス (ToMV)、タバコマイルドグリーンモザイクウイルス (TMGMV)

1) 生 態

TMGMVとToMVはタバコモザイクウイルス(TMV)と近縁のウイルスであり、生長点付近の新葉を中心にモザイクを生じるとともに、茎葉や果実にえそ斑を生じる。管理作業による汁液・接触伝染、土壌中に残存した罹病植物残渣による土壌伝染を行う。

2) 防除のねらい

- (1) 健全な地下茎を用いる。
- (2) ハサミの消毒を行う。
- (3) 罹病株は見付け次第抜き取り、処分する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 床土にはナス科植物を栽培した土壌を用いない。
- (2) 連作を避ける。
- (3) 罹病株は伝染源となるので、土壌中に残渣を残さないように地下茎ごと抜き取り、圃場外で処分する。

② キュウリモザイクウイルス (CMV)

1) 生 態

本ウイルスは宿主範囲が極めて広く、多くの植物が感染する。葉にモザイクや縮れ症状を呈し、生育も不良となる。主にアブラムシ類によって伝染し、種子伝染や土壌伝染はしない。

2) 防 除 法

- (1) アブラムシ類の防除を徹底する。
- (2) 見付け次第抜き取り、処分する。

2. ホオズキ 斑点細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

本病は葉に発生する。初め、葉に水浸状の小さな斑点を生じ、やがて拡大し、不整形な褐色病斑となる。激しい場合には、茎や果実にも同様な病斑が生じ、落葉、枯死する。露

地栽培での発生が多く、5月から発病がみられ、梅雨期に多発する。罹病株から採った株苗が伝染源となり、降雨、風により伝搬される。病原細菌は被害茎葉とともに土壌中に残り、翌年の伝染源となる。

2) 防除のねらい

健全な苗を利用し、病原菌を圃場内に持込まないように注意する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病圃場からの採苗はしない。
- (2) 被害茎葉、果実は伝染源となるため、圃場から除去する。
- (3) 水のはねかえりがないよう、マルチ等を行う。
- (4) 健全土壌に栽培する。

・薬剤防除

(ホオズキ 斑点細菌病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
31+25	マテリーナ水和剤 (オキシリニック酸, ストレプトマイシン硫酸塩)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. ホオズキ 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

下位の果実に褐色～黒褐色のややくぼんだ輪紋状病斑が生じる。特に、地表面に近い果実に発生が多く、激しい場合は茎葉にも病斑が生じる。病斑には剛毛を有する小黑点（分生孢子堆）を生じ、その中に形成される分生孢子が伝染源となる。露地栽培で発生が多く、施設では少ない。時期は6月上旬から発生がみられる。本病菌の発育適温は25～30℃である。

2) 防除のねらい

健全な土壌に栽培する。また、灌水等の水管理方法に留意して、土壌からの伝染を防止する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害株葉、果実は伝染源となるため、圃場から除去する。
- (2) 水のはねかえりがないよう、マルチ等を行う。
- (3) 健全土壌に栽培する。

4. ホオズキ 白 絹 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

発病した株の地上部は日中萎ちょうし、地際部に白色、絹糸状の菌糸束が認められる。菌糸上には、後に白～黄褐色の菌核が形成され、土壤中に混じって長く生存し、伝染源となる。菌核は土壤中で数年間生存が可能である。本病菌は花、野菜等多くの作物の根を腐敗させる多犯性菌で、敷きわら等で繁殖することが多い。生育適温は25～30℃である。

2) 防除のねらい

伝染源を圃場内に持ち込まないようにする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 被害株、病原菌のついた敷わら等は伝染源となるため、圃場から除去する。
- (2) マルチには敷わらを用いない。
- (3) 健全土壌に栽培し、未熟有機物の施用は控える。
- (4) 連作を避ける。

(害 虫)

1. ホオズキ アザミウマ類 [\[目次に戻る\]](#)

花に寄生するスリップス類は主にヒラズハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ等で、奇形花を生じ、商品価値を著しく低下させる。5月下旬から発生し、ピークは6月である。葉に寄生するスリップス類は主にミナミキイロアザミウマで、7月以降に新葉が萎縮し奇形する。

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除」参照

(ホオズキ アザミウマ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
4A	モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	花き・観葉植物で登録
※ 34	ファインセーブフロアブル (フロメトキン)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. ホオズキ ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

ホオズキには主にカンザワハダニとナミハダニが寄生する。葉の表面に点々とかすり状の白斑が現れる。また、葉の一部が不規則な円形状に黄変する。被害がすすむと落葉する。

高温乾燥の条件下で発生は増加する。露地栽培、雨よけ栽培ともに、5月から寄生がみられ、6月から7月にかけて徐々に増加する。

2) 防除のねらい

圃場により発生状況が大きく異なるので、圃場ごとに発生状況を適切に把握し、早期防除を行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

圃場周辺に雑草が多いと発生が増加するので、圃場周辺の除草を行う。

・薬剤防除

薬剤は新芽および葉裏までむらなく散布する。

(ホオズキ ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
13	コテツフロアブル (クロルフェナピル)	
-	サンクリスタル乳剤 (脂肪酸グリセリド)	多発時に効果を高めるために数日間隔で連続散布する。

注) IRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(7) スイートピーの病害虫

(病 害)

1. スイートピー うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

標徴は、葉や茎のほか、莢、巻きひげなどにも発生する。22℃～24℃で最も発生しやすいが、低温時にも発生する。初期症状では白色粉状の小班となって現れるが、次第に広がり、葉全体を覆うようになる。病勢の進展には多湿が適するが、乾燥状態では分生子飛散が多く被害が広がりやすい。

2) 防除のねらい

標徴の早期発見に努め、蔓延を防ぐ。施設内の湿度管理に留意する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 密植を避け、過繁茂にならないようにする。
- (2) 排水を良くし、多灌水を避ける。
- (3) 換気に留意し、過湿や乾燥状態にならないようにする。
- (4) 発病した部位は施設外に持ち出し、適切に処分する。

2. スイートピー 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

罹病組織あるいは有機物上で腐生的に繁殖したものが伝染源となり、風で分生子が飛散して蔓延する。本菌は2～31℃で生育し、15～27℃でよく生育する。曇雨天が続くと発病しやすい。葉や花、茎などに水浸状の病斑が生じ、多湿下では表面に灰色のカビを生じる。特に花弁などの花器や収穫・管理作業後の傷口から発病しやすい。

2) 防除のねらい

発病初期からの防除を徹底する。施設内の湿度低下に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病した葉や花は早めに取り除き、施設外に持ち出して処分する。
- (2) 排水を良くし、多灌水を避ける。
- (3) ビニルマルチや敷わらなどを用いて施設内の湿度の低下を図る。

(害 虫)

1. スイートピー アブラムシ類 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

エンドウヒゲナガアブラムシなど、マメ科植物を寄主とする種が加害する。スイートピーは比較的低温条件で栽培を行うため、冬期の施設内での発生はない。春期に施設外から飛来した有翅虫が発生源となり、急速に増殖する。高密度の場合にはすす病を併発する。休耕期には圃場周辺のマメ科雑草を寄主としており、次作の発生源となる。吸汁による直接的被害のほか、ウイルス病（BYMVやBBWVなど）を媒介する。

2) 防除のねらい

ウイルス病の伝搬は非永続的に行われるため、保毒した有翅虫を圃場内に飛来させないようにすることが重要である。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 育苗期は防虫ネットで被覆する。
- (2) 施設周辺にシルバーマルチやシルバーテープを用いて有翅虫の飛来を防ぎ、施設の出入り口や開口部に防虫ネットを設置し、施設への侵入を防ぐ。
- (3) 施設周辺のマメ科雑草を防除する。

(8) ストックの病害虫

(病 害)

1. ストック 菌 核 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は多犯性でハウスの低温多湿条件で発病し、多くの植物に寄生して被害を与える。

2) 防除のねらい

健全な床土を用いる。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 土壌中に伝染源が残っているので連作を避ける。
- (2) ハウスはできるだけ換気を図り、過湿にならないように適切な管理をする。

・薬剤防除

連作する場合は定植前にクロルピクリンで消毒する。「5. 病害虫防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」を参照。

(ストック 菌核病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、「[章末の簡易マニュアル](#)」を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. ストック 苗立枯病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

育苗中や定植直後の苗に発生する。地際部付近が褐変し細くくびれ、地上部は萎凋枯死する。病原菌の生育適温は 25～30℃で、高温でやや多湿の時に発生しやすい。

2) 防除のねらい

無病の用土を用いて発病を防ぐ。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 育苗には無病の用土を用いる。
- (2) 発病株は早急に取り除き適切に処分する。

・薬剤防除

(ストック 苗立枯病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M3+1	ホーマイ水和剤 (チウラム, チオファネートメチル)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

3. スtock 苗腐病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

育苗期や定植直後に発生する。幼苗の地際部が腐敗し、倒伏、枯死する。病原菌の生育適温は 25～30℃で、主として雨水や灌水を介して伝染する。

2) 防除のねらい

無病の用土を用いて発病を防ぎ、過湿状態にならないようにする。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 育苗には無病の用土を用いる。
- (2) 育苗床は排水をよくして過湿状態が続かないようにする。
- (3) 灌水には水道水などきれいな水を使用する。

(害 虫)

1. スtock コ ナ ガ (指定病害虫) [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

温度が 5℃以上で発育できるので、ハウス内では冬でも被害がでる。冬でも成虫の活動が見られることから、ハウスに侵入する恐れがある。キャベツ、ハクサイ、ダイコンなども加害するが、ストックでは秋の幼苗期に特に被害が大きい。発生回数が十数回と多いので、発育が不揃いになり、常に各態のものが加害している。

2) 防除のねらい

7～10 日おきに 2～3 回連続しないと、効果はあがりにくい。キャベツを周年栽培する地域では発生に注意すべきである。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) ハウス周辺にアブラナ科植物がある場合、ハウスサイドの防虫ネット被覆を行う。
- (2) ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。

・ 薬剤防除

(ストック コナガ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1A	オンコル粒剤5 (ベンフラカルブ)	
1A	ガゼット粒剤 (カルボスルファン)	
3A	マブリック水和剤20 (フルバリネート)	
-	コナガコン (ダイアモルア)	下記注意点参照

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

◎ ハウスでのコナガコン使用上の注意点

コナガコンは、コナガの合成フェロモンを利用することにより成虫の雌雄間の交信をかく乱し、交尾行動を阻害して次世代の幼虫発生を抑える作用をもつ新しいタイプの防除資材である。コナガ成虫にのみ作用し、抵抗性獲得の心配がなく、周辺環境にも優しい資材であるが、使用方法を間違えると本来の防除効果が発揮されないので、使用にあたっては以下の点に注意する。

- ① 発生密度が高くなってからの設置では効果が上がらないので、未発生～低密度時に設置する。
- ② ハウス出入口やサイド部は防虫ネットで被覆し、ハウス外からの飛来侵入を防止する。
- ③ 気化した性フェロモンの成分は、空気より重いので、フェロモンディスプレイは作物の背丈より高い位置に設置する（ストックのハウスでは、ハウスの棟の中央部に約2mの高さで張る）。
- ④ 有効成分である性フェロモンがハウス内に充満しやすいよう、一気に換気することは避け、空気の流動を少なくする。
- ⑤ コナガコンには殺虫効果はないので、発生密度が高くなった場合には他の薬剤との体系処理を行う。
- ⑥ コナガ以外の害虫にはまったく効果はないので、コナガ以外の害虫には他の防除手段が必要である。

(9) スターチスの病害虫

(病 害)

1. スターチス 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態 } [カーネーションの灰色かび病の項](#)を参照。
2) 防除のねらい }

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 施設栽培では換気を行い、多湿を避ける。
- (2) 被害茎葉は早めに除去し、伝染源を残さない。

・薬剤防除

(スターチス 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M7+19	ポリベリン水和剤 (イミノクダジン酢酸塩,ポリオキシシン複合体)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機槽による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. スターチス 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

初め、茎地際部が水浸状の腐敗斑を生じて軟化し、腐敗する。地上部は萎ちょうし、立枯れをおこす。病原菌は被害残渣とともに土壤中に長期間残存して伝染源となる。水媒伝染し、特に、30℃前後で多湿の場合に発生が多い。本病原菌はスターチスのほか、カーネーション、ユリ、シュッコンカスミソウ、イチゴ、ナス等も侵す多犯性菌である。

2) 防除のねらい

灌水等の水管理方法に留意し、土壌からの感染を防止する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病株は直ちに除去する。
- (2) 灌水の際、土粒を飛散させない。
- (3) 排水をよくし、ハウス内では多湿にならないように管理する。
- (4) 発病圃場付近でのカーネーション、ユリ、シュッコンカスミソウ等の栽培は避ける。

1. スターチス ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
 - 2) 防除のねらい
- } [キクのハダニ類の項](#)を参照。

3) 防 除 法

・耕種的防除

圃場周辺の雑草を除去する。

(10) シュッコンカスミソウの病害虫

(病 害)

1. シュッコンカスミソウ 疫 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

初め、地際根部の一部が水浸状となり、その部分から次第に根部全体が黄褐色に軟化腐敗する。地上部は萎ちょうし、やがて枯死する。病原菌は、被害残渣とともに土壤中で越冬し、水媒伝染する。発育適温は 30℃前後で、多湿の場合、特に降雨の多い時期や灌水したときに発生が多い。本病菌はカスミソウのほかカーネーション、ユリ、ナス、イチゴ、トマト等も侵す多犯性菌である。

2) 防除のねらい

灌水等の水管理方法に留意し、土壌からの感染を防止する。

3) 防除方法

・耕種的防除

- (1) 発病株は直ちに除去する。
- (2) 灌水の際、土粒を飛散させない。
- (3) 排水をよくし、ハウス内では多湿にならないように管理する。

2. シュッコンカスミソウ うどんこ病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉、茎、花梗にうどん粉をまぶしたような症状となる。

本病の発生はブリストルフェアリー、ゴラン、ブランシー、ビックベン、ニューフェイスで確認されている。

病原菌は原寄主に限られた寄生性を示す系統に属する菌で、孢子発芽適温は 15～26℃、湿度は 10～100%である。

2) 防除のねらい

健全な苗を利用し病原菌を圃場内に持ち込まないよう注意する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発芽した葉、茎、花梗および採花後の株は処分し、施設外に持ち出し、埋没処理する。
- (2) 採苗は無病圃場の親株から行い、施設内に発病株および保菌のおそれがある株を持ち込まない。

(害 虫)

1. シュッコンカスミソウ ハダニ類 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 生 態
2) 防除のねらい } [キクのハダニ類の項](#)を参照。

3) 防 除 法

・薬剤防除

(シュッコンカスミソウ ハダニ類)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3A	マブリック水和剤20 (フルバリネート)	
12D	テデオン水和剤 (テトラジホン)	
12D	テデオン乳剤 (テトラジホン)	

注) IRAC コードについては、章末の [「作用機構による薬剤の分類」](#) 参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(11) シクラメンの病害虫

(病 害)

1. シクラメン 萎 凋 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

主に根、塊茎に発生する。初め、一部の葉身または半数の葉身が黄変し、しおれかけては回復する様子を見せながら、次第に萎ちようし、枯死に至る。軟腐病とは異なり、軟化せずに萎ちようし、茎を切断すると維管束が褐変している。病原菌は土壤中で越冬する。

2) 防除のねらい

発病後の防除は期待できないので、予防策の徹底に努める。

3) 防 除 法

・耕種的防除

[シクラメンの軟腐病の項](#)の項を参照。

・薬剤防除

土壌消毒については「VII. 病害虫防除共通資料 (7) 土壌消毒・資材消毒」の項を参照。

(シクラメン 萎凋病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	ベンレート水和剤 (ベノミル)	

注) FRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

2. シクラメン 炭 疽 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉身や塊茎に発生する。被害残渣とともに菌糸や分生子層の形で越冬して伝染源となり、灌水時の水しぶきとともに、分生子が飛散して伝染する。多湿条件で発生が多い。また、種子伝染する。本病原菌の最適発育温度は 28℃で、イチゴ、リンゴ、ブドウ等にも寄生する多犯性菌である。

2) 防除のねらい

灌水等の水管理方法に留意し、感染を防止する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

(1) 発病株は直ちに施設外に持ち出し、処分する。

- (2) 底面灌水を行う。できない場合は、灌水の際、土粒を飛散させないように注意する。
- (3) 施設内では多湿にならないように管理する。
- (4) 無病株から採種する。
- (5) 発病には品種間差異がみられ、ローズピンクで弱く、ビクトリアは強い。

・薬剤防除

(シクラメン 炭疽病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
3	ヘルシード乳剤 (ペフラゾエート)	施設栽培に限る
M1	オキシンドー水和剤 80 (有機銅)	
M3	ジマンダイセン水和剤 (マンゼブ)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

3. シクラメン 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

・薬剤防除

(シクラメン 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
1	トップジンM水和剤 (チオファネートメチル)	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤 (ピリベンカルブ)	
M7+19	ポリベリン水和剤 (イミノクタジン酢酸塩,ポリオキシシン複合体)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

4. シクラメン 葉腐細菌病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

葉身、葉柄、芽および塊茎が侵される。葉身、葉柄では、初め、水浸状の斑点を生じ、やがて黒褐色に腐敗するが、腐敗した部位は軟弱状にはならず、悪臭もない。栽培期間を通じて発生するが、高温多湿で発生しやすい。汚染用土、鉢、ベンチ等が第一伝染源となり、発病後は枯葉かき、灌水あるいは植え替え等の作業管理によって傷口から感染し、蔓延する。

2) 防除のねらい

用土、鉢は健全なものを使用する。高温、多湿および多肥栽培を避け、また植物に傷をつけないよう管理する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

[シクラメンの軟腐病](#)の項を参照。

・薬剤防除

土壌消毒については「5. 病害虫防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」を参照。

(シクラメン 葉腐細菌病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	キノンドー水和剤40 (有機銅)	葉及び花卉にかからないように注意する。
M1	キノンドー水和剤80 (有機銅)	葉及び花卉にかからないように注意する。

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム（農林水産省）](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

5. シクラメン 軟 腐 病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

病原菌は根菜類などを侵し、多犯性で土壌中で越冬する。発育適温は32℃位で、多湿の場合には発病が多い。病原菌は細菌の一種で、傷口から侵入しやすく、灌水時のしぶきによって蔓延することが多い。

2) 防除のねらい

多湿にならないよう管理を行い、灌水は土粒が飛散しないよう地際に丁寧に行う。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 鉢および用土は消毒をしたものなど健全なものを用いる。
- (2) 発病株は直ちに除去、処分する。

- (3) 灌水の際、土粒を飛散させない。
- (4) 植物に傷をつけないよう管理する。

・薬剤防除

「5. 病害虫防除共通資料 (10) 土壌消毒・資材消毒」の項を参照。

(シクラメン 軟腐病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
25+M1	ドーマイシン水和剤 (ストレプトマイシン硫酸塩, 有機銅)	

注) FRAC コードについては、章末の「[作用機構による薬剤の分類](#)」参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、「[農薬登録情報提供システム \(農林水産省\)](#)」を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。

(害 虫)

1. シクラメン シクラメンホコリダニ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

被害は春期の幼苗期で激しい。夏期はいったん減少し、9月から10月にかけて再び被害がみられるようになる。また、12月頃に花やつぼみの中に寄生し加害することもある。

シクラメンの他に、キンギョソウ、キク、ゼラニウム、ペゴニア、ペチュニア等にも寄生して被害を与え、また相互の発生源となる。

2) 防除のねらい

肉眼では見えにくいいため、発見が遅れがちになりやすいが、発生初期の防除を徹底する。

3) 防 除 法

・耕種的防除

過度の乾燥を防ぐ。

2. シクラメン ミカンキイロアザミウマ [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

2) 防除のねらい

3) 防 除 法

・耕種的防除

「3) 野菜・花き病害虫の生態と防除 コナジラミ類」項を参照

・薬剤防除

(シクラメン ミカンキイロアザミウマ)

IRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
14	エビセクト水和剤 (チオシクラム)	
14	パダンSG水溶剤 (カルタップ)	

注) IRAC コードについては、章末の[「作用機構による薬剤の分類」](#)参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#)を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#)を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください（[アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#)）。

(12) パンジーの病害虫

(病 害)

1. パンジー 灰色かび病 [\[目次に戻る\]](#)

1) 生 態

罹病植物の残渣や土壌中で長期間生存し伝染源となる。罹病組織あるいは有機物上で腐生的に繁殖し、分生子が飛散して蔓延する。本菌の生育温度は2～30℃、発病適温は20℃である。曇雨天が続くと発病が多い。葉や花、茎などに水浸状の病斑が生じ、多湿下では表面に灰色のカビを生じる。葉では病花の残渣が付着したところから発病することが多い。

2) 防除のねらい

発病初期からの防除を徹底する。施設内の湿度の低下を図る。

3) 防 除 法

・耕種的防除

- (1) 発病した葉や花は直ちに除去し、施設外へ持ち出して処分する。
- (2) 灌水等の水管理方法に留意し、発病・感染を防止する。
- (3) 施設栽培では、換気に留意し湿度の低下を図る。

・薬剤防除

(パンジー 灰色かび病)

FRAC コード	薬 剤 名 (成 分 名)	備 考
M1	サンヨール (DBEDC)	花卉の退色等の薬害が生じる恐れがあるので、開花中は使用しない

注) FRAC コードについては、章末の [「作用機構による薬剤の分類」](#) 参照

注) 各薬剤の農薬登録情報は、[「農薬登録情報提供システム（農林水産省）」](#) を参照してください。使用方法については、[章末の簡易マニュアル](#) を参照してください。

注) 各農薬の水産動物に関する注意事項については、FAMIC ホームページの、HOME > 農薬 > 登録・失効農薬情報を参照してください ([アクセス方法については、巻末の使用
方法参照](#))。